
始まりはいつも突然に(仮)

猫碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりはいつも突然に（仮）

【Nコード】

N0779J

【作者名】

猫碧

【あらすじ】

どうにもこうにも何でこうなったかわからない。

全ては巻き込んでくれた我が幼馴染が召喚されたせいであって巻き込まれた俺にはなんの原因もないはずだ。

平凡な日常から一転、魔法やら精霊やら頭がパンクしそうです。

はてさて、元の世界に戻るのはいつの日か……。

父さん、母さん、じーちゃん、ばーちゃん元気ですか？

俺は異世界でそれなりに元気でやっています。

※あらずじなんててきとーです。正直思いつかなかったのです。

※巻き込まれ型異世界迷い込みの上に主人公が最強物です。

ありがちなお約束展開、テンプレ、ご都合主義。

重度の中二病を患った作者が送るgdgdストーリーでございます。そういったモノに食痛気味のあなたは戻るをクリックしたほうがいい、マジデ

※そのうち戦闘することになると思うので残酷描写ありにチェック入れました。

※ 改稿作業終了しました。

3／1 第1部分と第2部分の改稿完了しました。

3／2 第3部分の改稿完了しました。ここまでで旧第5部分までの話になります。

3／5 第4部分〜第5部分まで上書き更新しました。序章はこれで終了です。

序章 (1) (前書き)

処女作でございます。文章の勉強なんてしてこなかったしそんな才能があるとも思っていないません。

ですが頭の中でネタを考える日々には飽いたのです。

重度の中二病故にアイタタタと思っても笑ってあげてください。せいぜい訪れた方の暇つぶし程度になれば幸いです。

3 / 1 改稿しました。詳細はあとがきをご覧ください。

序章 (1)

始まり	――――	――――	日常の終わり／非日常の
-----	------	------	-------------

その日は多少天気が悪くても普段と変わらない、なんてことのない一日のはずだった。

「ゆずー、そろそろ帰ろうよ」

そうやって声をかけてきたのは野村のむられんげ 蓮華隣のクラスにいる俺の幼馴染で親友だ。

見た目は典型的なお嬢様って所だろうか？

烏の濡れ羽色をした黒く艶やかな髪、雪のような白い肌、鈴の音を思わせるキレイな声、さらに容姿だけでなく勉強の成績は上位グループの常連だし運動神経だって頭抜けている。

天は二物を与えずなんて言うけどありゃあ嘘だね。本人的にそれがいい事かどうかは別として……。

男に告白された数は高校に入学して1年半経ってそろそろ300を中学までの分を合わせたら超えるんじゃないだろうか？

そんなどうでもいいことを考えつつ「すぐに追いつくから下駄箱で待っててくれ」と返事をした。

さて、蓮華アイツでも人を待たせていることだし手早く帰宅準備をして追いつかないとね。

空の弁当箱よし、課題も持ったし図書館で借りた本もカバンに入れた。携帯も……ちゃんと上着のポケットに入ってるな、うん。

学校に携帯を忘れるのはわりと……いや、だいぶ悲惨な事態になるからな。

そんな悲惨な事態に陥るのは一度で十分だ。アレ以来帰宅時の携帯チェックは欠かせなくなった。

などとアレコレ荷物をまとめ下駄箱まで到着すると蓮華は新入生っぽい男子から告白されていた。

あらあら、カワイソウに……。彼はこの後地獄を見ることが確定している。

キツパリとゴメンナサイされただけなら枕を濡らすぐらいで済むんだろうが、哀れなことに追加で羞恥と悶絶する事実も待っているのだ。

もう少しだけ蓮華アイツについて説明をしておくことにする。

『容姿端麗成績優秀運動抜群な完全無欠な美少女パーフェクトヒロイン』であるのは先に説明した通りであるが正確には

『容姿端麗成績優秀運動抜群な完全無欠な美少女パーフェクトヒロインに見える男』

なのである。奴の最たる欠点が『性別が男である』ここに尽きると

思われる。

150cmという高校生男子にしては低めの身長、とても男のものとは思えない声、そしてあの容姿、どこをどう見たって男には見えない。どう考えても生まれてくる性別を間違えている。

もちろん本人にそんな事を言ったらぶっ飛ばされるのがオチだ。

事実その手の発言を正面から告げて宙を舞った奴らを四人ほど知っている。

当然だが比喻表現的な意味でなく普通にぶっ飛ば。具体的には5mぐらい。

美少女然とした奴にメートル単位でぶっ飛ばされる光景はシュール以外の何物でもない。

さて、ついでだから俺の自己紹介もしておくことにする。

俺の名前は千野^{ちのゆずた} 柚太16歳、平凡な高校二年生だ。

柚太ってのは自分で言うのもなんだが変わった名前だと思う。

近しい奴らからはユズとかゆっさんとか呼ばれている。

成績はそれなりに上位、運動に関しては人並み程度、容姿は平凡と

蓮華^{アイツ}と比べたらまるで普通。

蓮華^{アイツ}に勝っているところなんて身長ぐらいだろうか？ 因みに190

cmな。

公言している趣味は山登り。登山なんて本格的なものでなくハイキング程度のものである。

特技兼隠れ趣味はロープ操り。投げ縄みたいなものだと思ってくれれば問題無い。

55mのザイルを携帯する程度の変った趣味なのである。川で溺れた小学生とか助けられるぜ？

そんな有意義に使えた経験なんて1回しかないわけだが……。

はじめた切欠は忍者に憧れたとかそんなガキっぽい理由であるがくだらない部分で案外重宝する。

特異面では靈感が強いらしい、と言っても何も無い奴に比べればと言っただけであってこんな方面すら蓮華アイツの方が勝っているあたり実に規格外野郎である。

さて、突発イベントも無事終了したので帰路につく。

「しかし十月になってもお前に告白する奴が残ってたんだな」

「半年程度じゃ私の性別が認知されるには足りないって事なんでしょうか？」

そう答える蓮華アイツの表情は苦虫でも噛み潰したようなしかめっ面だ。

「ま、そういうことだろうけどそればっかじゃないだろうな」

「んん？ どういう意味？」

「噂じゃお前が男ってのは緘口令が布かれているらしいな」

「はあ！？ 意味がわかんないよ！」

「先輩方の愛のある仕返しだろう。アレだけ熱心に勧誘されてるのに梨の礫じゃないか」

「だって部活動なんて柄じゃないよ……。読書とゲームとTVに時間が割けなくなるじゃないか！」

ああ……。そうだ。コイツってオタクの部類だったわ。所謂『隠れオタク』という奴だ。

学校じゃ擬態が完璧すぎて誰も本性は知らないはずだがこんな理由で断られる先輩も少し哀れだな。

うん、ちよつといぢめてあげようそうしよう。

「そんな理由で断られてると知ったら先輩方落ち込むぞ、きつと」

「ばれなきゃ大丈夫だよ。ほら私の擬態って完璧だし？」

「まあ緘口令を布かれてるのもその擬態のせいだと思うけどな」

「はえ？」

「つまりだ。お前の擬態って大人しいキャラだろ？だから余計に男に見えない。だから男から告白される羽目になるわけだ。そうしてまんまと騙されたうえに哀れにもお前に愛の告白なんてしちまった先輩方としては犠牲者みちづれを増やしたいんだろう。」

「ええー……………」

ちよ、口からなんか出てるぞオイ。

「おーい、しっかりしろー、かえってこーい」

肩を掴みガクガク揺さぶると十秒ほどで帰ってきたらしく「……………帰って寝る」とボソリ。

そうしてふらふらした足取りで自宅の方へ歩いていく。

オイオイ、大丈夫か蓮華アイツ……あ、電柱にぶつかりやがった。アレは痛そうだ。

うーむ、念の為に家まで一緒に行ってやるかな。きっと半分ぐらいは俺のせいだし。

「おーい、どうせ近所なんだし一人で帰ろうとするなよ」

—————そうやって声をかけながら駆け寄ろうとした瞬間、空気が変わった。

「なんだありゃ……門か？」

見た感じ両開きの馬鹿でかい門扉だけが唐突に空中に現れた。

何この展開、意味が全くわかりません、がなんだかヤバイ予感がする。

俺はこの手の感が異常に鋭い、というか嫌な予感がして嫌な展開にならなかったことなんて無い。

的中率100%ってすごいよね！

まあそんな事はどうでもいい。今はこの場から蓮華^{アイツ}を連れて逃げ出すことの方が先決だ。

とりあえず呆然としている蓮華^{アイツ}に近付こうとした所でやはり唐突に門が開いた。

しかも『ギギギギギ……』なんて擬音とかでゆっくりじゃなく『バンッ』とでも鳴らんばかりの勢いで一気にだ。

正直コレは予想外。いや、現状何から何まで常識外だし些細なこともかもしれないけどさ……。

オマケに門の先は真っ黒で向こう側が見えないのでとても嫌な感じだ。

「わわわっ！？なんか吸い込まれちゃう感じ？」
そんな蓮華^{アイツ}の悲鳴でハツとする。

俺自身は吸い込まれていないようだがアイツは違う。

外灯にしがみ付いて耐えているようだが人間鯉鱗状態で見た目がすごいシュールだ。

あわてて俺がロープ繰りでアイツの体にザイルを巻きつけるのと同

時に近くの電柱に駆け寄った。

一人で踏ん張っても抗えないだろうし、とりあえずは反対をどこかに固定しないと拙い。

「ひゃわああああーっ!？」

「っておい! せめて反対をどこかに固定できるまで耐えててくれよっ!？」

電柱まで後三步くらいだったのに……。

しかも心構えが出来なかったから俺まで一緒にあっさりと吸い込まれてしまいました。

ほら、やっぱりヤバイ予感的中じゃないか……。

――――――――――そうして門を潜り抜けた先は空中でした。

「えええ!？」

ちよつと待ってくれ何で空中なんだ。意味がわからないぞ……。

地表から何千mなのか離れているのか知らないが地表と俺達の間には雲がある。

コレは死んだ、パラシュートも無しに無理ゲー過ぎるだろ。

でもすぐに墜落死ということはなさそうだ。

なぜなら俺達は落下していない。何かに引き寄せられるように空を飛んでいるのだ。

30mぐらい先を飛んでいる蓮華^{アイツ}を見るとどうやら意識が無いらしく四肢が完全に脱力している。

とりあえず合流しようと思ひザイルを手繰ろうとしたら目的地に着いたらしい。

飛ばされる先にまた門があるのが見えたのだ。

見た目も大きさも同程度、違う点は最初から扉が開いているところか。

どうにもまたアレに吸い込まれると言うことらしい。

やはり門の先は真っ黒で見えない。やれやれ、今度はいったいどこに繋がっているのやら……。

せめて今度はいきなり死ぬ可能性の無い場所にしてくれよー？

などと諦めの境地の俺に更なる絶望がプレゼントされた。

ザイルの先にいる蓮華^{アイツ}が門を潜った瞬間、俺には用が無いとばかりにボタンと閉じたのだ。

そりゃもう最初の門の時に開いた勢いと同様に一気にな！

「はあっ!？」

そうやって叫んでしまっても無理は無いと思うんだ。

何から何まで予想外すぎる……。

あ、ダメだ……正面衝突コースです、本当にありがとうございました。

「痛いよ……」

とりあえず門扉に挟まれたザイルのおかげで墜落死は免れたらしい。改めて門を観察して見るとなにやら番号が書いてある。

「37564246……みなごろしにしろ、か。なんて物騒な数字だ」

いや、そんな語呂合わせをすぐ思いついてしまう俺が物騒なんだろうか？

そんな事は無い、と思いたいなあ……。

「さて、いつまでもこうしている訳にも行かないがどうするか……」
とりあえず現状を口に出して確認して見るがどうにもお手上げだった。

「地平線が丸くない、って事はやっぱり地球ではないんだろうな」
この高度から少しも地平線に丸みが見えないって事は相当ではないだろうか？

体力が無限にあるわけでも無いしこのままでは墜落死は免れないが
現状を打破する手段も無い。

そうしてふと上を見上げると門が消えかけていることに気が付いた。

「ちょ、マジか!？」

ヤバイヤバイヤバイ、非常にヤバイ!!

門が消えてもザイルがそのままなら宙ぶらりんなんだろうがそんな
確証は無い。

何より俺の感が告げているこのままではヤバイと。

さっきも言ったがこの手の感は的中率100%だ。ああダメだ……
コレは死んだ。

パラシュート無しでスカイダイビングとか洒落にならない。

ああもうどうしようもないわ……と諦めたところで俺は自由落下を
開始した。

哀れな柚太君は地面に叩きつけられその体は木っ端微塵になりました

周囲を見渡しても声の主の姿は見えず、どういう原理で落下速度が緩くなったかもわからない。

頭の中は疑問符だらけである。

それでもわかったことは、なんとか墜落死は免れたらしいという事それだけである。

とりあえず声の主は俺の前に姿を現す気がなさそうだし地表に降りるまでにこの速度だと随分かかりそうなので周囲を観察して見ることにした。

「ふーむ、やっぱり地球じゃないな。」

アレコレ観察してからそう呟く。

山や森林に草原、海らしきものこの辺りは地球上にもあるだろうが規模が違う。

こんな広大な森林が地球上にあるなんて聞いたことが無い。

何より宙に浮かぶ島が点在しているのが決定的だ。

あんなものはマンガやアニメの中でしか見られないものだと思っていたんだがなあ……。

どう考えても地球ではない。ではどこに來たのか？

そんな事わかるはずが無い。異世界の存在なんて信じていなかったし地球以外に生命がいる星も知らないからだ。

既に俺の知っている常識とはかけ離れた出来事が頻発しているのでいまさらどんな事実が出てきてもあまり驚くようなことはないだろうな、なんとなくだがそう思った。

色々と思考に沈んだ時間も過ぎ段々と地面が近づいてきて、ようやく地に足を付けることが出来そうだと思うと同時に予感がした。

—————これは簡単に帰れそうにないなあ……と、本当になん

となくだがそんな予感が。

序章 (1) (後書き)

ついカッとなって書いた。すでに公開している。

社会人のため更新ペースは1週間に1度出来ればいいところでしょうか？

まあなんにせよ犀は投げられたのです。完結を目指して頑張ります。

3／1 追記

諸事情によりほぼ全面改稿開始しました。

もうだいぶ変わっているので始めから読み直すこと推奨です、ゴメンナサイ。

新第1部分は旧版の第1部分、第2部分の終盤ぐらいまでになりました。

今後1部分あたりを今まで2,000字だったのが5,000字程度になります。

因みにこの数字は改行と空白を含みません。

改稿するにいたった理由は設定の不備もありますが説明でだらだらと話数を稼ぐのが嫌なのでなら一話あたりの分量を増やしてしまおう。

そんな理由もあったりします。

次話以降も改稿が終わり次第上書きして行きますのでよろしく願います。

今後の予定に関しては活動報告をご覧ください。

Twitterの方は愚痴とか作者近状です。

序章 (2) (前書き)

1週間に1回と言いつつ早々の更新です。
暇つぶし程度に読んであげてくださいな。

12/22 少々追記しました。詳細はあとがきにて。
3/1 改稿しました。詳細はあとがきにて

序章 (2)

— — — — — 異世界よこんにちは — — — — —

さて、ようやく地面に足を付くことが出来た。

正直ふわふわ漂ってるのは違和感があって仕方がなかったんだ。

自分の意思で浮いているならまだしも自分じゃ何も出来ないしなあ

……。

とりあえず助けてくれたのはどちら様なのかな？

出てきてくれるとありがたいんだけどなー、と思いつつ周囲を見回すとちょうど俺の正面の茂みの向こうに人影が見えた。

近付いてきた人影は女性だった。しかも美人さんだ。

腰辺りまで伸ばしたキレイな銀髪に白い肌、瑠璃色の瞳に整った体型。
アイツ

蓮華が和製完璧な美少女ならこっちは洋製完璧な美人パーフェクトヒロインと言ったところだろうか。
パーフェクトレディ

身近に—あんな（蓮華）のがいるせいであまり女性に目を惹かれる
って事はなかったんだがコレはさすがに……。

そんな事を考えていたら「こんにちは」と近付いてきた人影が声を
掛けてきたので挨拶を返す。

「こんにちは、君が俺を助けてくれた人かな？」

「ええ、そうよ。近くまで遊びに来ていたら突然助けを求める声が
聞こえたからびっくりしちゃったわよ？」

そうクスクス笑いながら告げられた。うーん、美人さんは何をして
も様になるなあ。

「すいません……。でも本当に助かりましたよ。あのままじゃ墜落
して木っ端微塵でしたから」

「どういたしまして。無事助けられてよかったわ」

「感謝してます。自分じゃ何も出来ませんでしたから……」

「やっぱり貴方は外から来た人なのね。今の状況はわかる？」

外から……ね、この場合は外国って意味じゃないんだろうなあ、や
っぱり。

「なんとなくは……。少なくとも俺の生きていた世界とは違うこと
ぐらいですけど」

「そうね、そこがわかってるなら大丈夫よ。パニックもおこしてい
ないようだしね」

「混乱はしてるんですけどね。無駄に騒ぐよりいいかな、と」

なによりこんな美人さんの前で慌てふためく無様な姿は見せたくな
い。

俺だって男なのだから見栄はある。美人さんの前ならなおさらだ。

「いい心がけだと思うわよ。それにしても救助隊の方々遅いわね……
。何してるのかしら」

「救助隊ってそんなにすぐ来るものなんですか？」

「普通は歪ひずみの発生から五分もしないうちに来るわね。到着に時間を
掛ければ掛けただけ外の世界からの落とし物が多くなるから。事後処
理も面倒だしね。」

「歪……ですか。どういうものなんですか？」

「そうね、世界に唐突に開いた穴といった表現でいいのかしら？ 発生すればすぐ観測できるしそのための警戒もしているけれど発生の原理までわかっていないから……」

「穴……？ 俺は扉というか門みたいなのを潜って此処に来たんですけど」

「えっ！？」

目の前の美人さんは驚きの声を上げると同時に顔を青褪めさせた。

「……その反応は何か問題があるんですね」

「え、ええ……。その説明をする前にどういう状況で門を潜ったのか教えてもらえるかしら？」

「はい、カクカクシカジカとこういう訳なんですが……」

手抜きって言わないで！ともあれ此処にきた経緯を説明する。

「なるほどね。多分その門は『召喚の門』サモンズゲートだと思うわ。本来なら異世界から召喚対象のみを選別して世界を移動させる魔法なのよ。たぶんそのロープで繋がっていたから門は貴方も一緒に吸い込んだのね。貴方が潜らないうちに門が閉じたのは貴方のお友達が世界に到着したところで魔力供給を断ったとかそんなところだと思うわ」

「なるほど、よくわかった。それで問題はなんでしょうか？」

「歪は観測しているけど門までは観測していない。コレでわかるかしら？」

「ふむ、つまり俺の帰るべき世界がどの世界かわからない。そんなところでしょうか？」

「正解。ちゃんと考えれる子みたいね。それじゃ自己紹介をしましょうか」

なんぞそれ、意味わかんないですよ？ おねーさん……。

「そんないまさら何言い出してるのこの人みたいな顔しないで？ いまさらになったのにもちゃんと理由があるんだから」

「その理由とは？」

「貴方が歪に落ちた被害者だと思ったからよ。この被害者は此処で

の記憶を忘れてもらってから送り返されるの。十分足らずでお別れする相手に自己紹介なんて必要ないと思ったんだもの」

「納得しました。それではこちらから。俺の名前は千野柚太、君から見て異世界人だ」

「最後の下りは知ってるわよ。私はツアイティム・パトリシア、長いからパティかトリシヤっていいわ」

「よろしく、パティ。俺の事は柚太でいいよ」

「よろしくね。んー……ユズタって呼びにくいからユズでいいかしら？」

「もちろん、そうやって呼ぶ友達も多いしな。因みに柚太が名前で千野が苗字……家名って言ったほうがわかりやすいか？」

「名前の並びは私と一緒になのね。パトリシアが名前でツアイティムが家名になるわ」

「おう、てつきり逆かと思ってたよ。その手の発音の名前は俺の世界じゃパトリシアの方が家名になってるんだ」

「私もいろんな異世界を見てきたけどそういう世界の方が多いわね。貴方の元の世界の名前教えてもらえる？」

「世界の名前か、そんな事は聞いたことないけど惑星名でいいなら地球って名前だよ」

「地球！？ふふふ、運命……コレは運命だわ！」

「なんだか様子がおかしいっていうかテンションがいきなりMAXになった感じがするぞ……」

「え、えーっと……どうしたんだ急に」

「私って地球ファンなの、後でいっぱいお話ししようね、くふふふふ」

「笑いかた怖いよ……。なんだこれ、さっきまでの淑やかな雰囲気はドコへいつの！？」

「……………」

「俺呆然です、ぽかーん。」

「ごめんなさいね。地球のことになるとちよっと我を忘れちゃって

……。それじゃ現状把握のためにも色々説明してあげるわね」

「なんかえらそーですね、おねーさん……」

思わずそんな事を言って苦笑してしまった。

「いいじゃない、どの道必要でしょ？」

と言ってウインクして来た。ヤバイ、この人カワイイな。顔赤くな
ってないだろうか……。恥ずかしい。

「まずはこの世界の名前からね。この世界は『トテイアネ』と言います。この名前には特別な意味があって『全てのお隣に存在する世界』って意味なの。ここから推察できる事はあるかしら？」

「はい、少なくとも俺のもといた地球と蓮華^{アイツ}が召喚された以外にも
無数に世界はある」

「正解。とても沢山あるわよ？ だーれもその実態を把握できないぐ
らい無数にね」

「そんなにあるのか……。蓮華^{アイツ}が召喚された世界の扉に37564
246って数字があったんだがコレは世界のシリアルナンバーみた
いなものと考えていいのか？」

「そうね、その考えで間違いないわよ。そんな数字よりずっとずっ
と多い数の世界が存在しているわ。例えば貴方の世界にシンデレラ
って童話があるわよね？」

「うん、あるよ。っていうか何でそんな事知ってるんだ……」

「言ったでしょ、地球ファンだって」

そう言ってまたクスクスと笑う。

「そーいやさつきそー言ってたな。それでそのシンデレラがどう関
係して来るんだ？」

「シンデレラって言うのは地球じゃない異世界で実際に起こった出
来事なの」

「そうなのか。……要するにそれはどういうことなんだ？」

「あんまり驚かれないのも寂しいわね。物語を思いつくことっていうのは実は異世界を覗き見ているのと一緒になの。実際には異世界自体を見ているんじゃないけどね」

「じゃあ何を見ているんだ？」

「生命の書、アカシックレコードとも言うわね。普通は自分の世界の生命の書に繋がるんだけど少し相性が別の世界寄りになっているのね。因みに自分の世界の生命の書に繋がれば預言者になれるわ」

「アカシックレコード……って確か世界の始まりから終わりまでの全てが記されているってやつか……。なるほど、それで預言者ね……ん？それってつまり物語の数だけ異世界が存在するって事？」

「うん、なかなか理解が早くてよろしい。それじゃ、シンデレラという話を例にあげるわね。とある地球ではシンデレラを助けるのが魔女なんだけど、また別の地球では魔法使いなの、さらにそのまた別の地球ではシンデレラが男で舞踏会はお姫様の婿探しっていうものまであるわ。おもしろいでしょ？」

「つまりパラレルワールドの数だけ世界は存在しその分だけ生命の書が存在している？」

「おおー、大正解です。さらにユズの生まれなかった地球もあるしユズのお友達が存在しない地球もあるわよ。さてそこから導き出される答えは？」

「俺が元の世界に帰るのは途方もなく難しいことだってことか」

「よく出来ました。でも安心して、トティアネだけは違う。この世界の生命の書という物は存在しないわ。つまり行動如何で何でも出来るわ。不可能だって可能になる」

「生命の書がないっていうのはどういう世界なんだ？」

「未来が不確定って言うのもあるけどトティアネが特殊なの。ここでは時間が流れない……ちょっと違うかな。確かに時間の経過はあるんだけど時間の概念がないとも言ったらいいのかな？この世界でいくら時間が経とうが外の世界にはなんら関係がないの。世界移

動の時に開く門には座標の他に時の概念が加わる。この世界で30年過ごした後に元いた時間に帰ることも可能だし30年後に帰ることも可能なの。」

「つまり蓮華^{アイツ}を助けてから元の時間に帰ることも可能なわけか」

「そうね、それも可能。ただし貴方は人間だからきつと元の世界が見つかる前に老衰で死ぬわね」

「ですよ。打開策は？」

「人間やめちゃえばいいわよ」

おねーさん……さすがにそれはないわ。俺どん引きです。

「まってまって、引かないで。えーとね、私は精霊なんだけど同じ存在にならないかってこと」

「人間やめるのは確定事項なんです。それだけでも十分引く理由になるんですけどメリットは？」

「まず不老になるわ。受肉すれば普通に年を取ることも可能よ。受肉した状態で死んでも精霊に戻るだけで完全に死ぬことはないわ。精霊を滅ぼせる存在なんてそんなにないしね。」

「当然デメリットもあるんだろう？」

「もちろん、簡単に死ねないと言うことは生きるのに飽くことがあるわ。やっぱりそう言う死にたがりの精霊もいるしね。あとは輪廻から外れてしまうということ。精霊のまま死んだらそのまま消滅よ。生まれ変わることはもう無い。力が強い精霊になった場合どこかの世界のカミサマに据えられるかもしれないわね。もちろん何もしなくても年月を積み重ねることで勝手に力が強くなるから長生き程面倒なお役目が回ってくるわ。うまく逃げてる精霊もいるみたいだけどね」

「うーん、メリットの方が圧倒的に大きいな。こんなんじゃないかな精霊になりたがるんじゃないか？」

「そうでもないわ。ま、精霊になれることを普通は知らないし知っていても手段がない。」

「そうなのか？」

賢い魔法使いとかこの世界に無理やり乗り込んできそうなもんだがなあ……。

「大体何考えてるかわかるけど普通はトティアネで人間が意識を保てるほうがおかしいのよ?」

「なんですと?」

そういえば蓮華^{アイツ}も気を失っていたっけね。

「本当に、という理屈で意識を保っているのかわからないけど非常識よね」

「んなこと言われてもなあ……。俺にもわからないし」

「それもそっか。さて、それじゃあ精霊になるって事でいいかしら?」

「なんか勝手に決定事項にされている気がするがそれで頼むよ。元の世界に戻って違和感なく過ごせるんなら問題ない」

「あら、意外とあっさり決めちゃうのね。精霊になった後にやっぱ人間に戻りたいですってことは無理だからね?」

「いまさら曲げたりはしないよ。ただ現状それが一番いい選択肢だろうしね」

俺にだって思うことがない訳ではないがこの世界に来てしまったからには決断しなければならぬ。そんな事はこの先いくらでもあるだろうしなるべく最悪手を打たないよう立ち回るだけだ。

過去には戻れないし……精霊になれば戻れるんだろうが此処に来てしまった事実は変わらない。

ならば今出来ることを精一杯やる。たとえベストが無理でもベターの結果を掴み取る、それだけだ。そうだ、コレも聞いておかないとな。

「そういえば聞いておきたいことがあるんだが」

「いいわよ。随時質問は受け付けてるし」

「簡単に精霊になりませんかっって聞いてきたけど精霊になるのってそんなに簡単なのか?」

「簡単な訳ないじゃない」

パーティはなに言ってるんだと言わんばかりの呆れ顔。

ま、そりゃそうか。そんなに簡単に精霊になれたらそこらじゅう精霊だらけだ。

やっぱりなんか試練とかそんなのをクリアしなきゃならないんだろうか？

「で、なにをすればいいんだ？」

「祠で祈りを捧げて木の実を食べるだけよ」

――――――ちょっとまで、そのドコが簡単じゃないんだ！？

序章 (2) (後書き)

どうにか異世界入りを果たせました。

次回はパーティによる世界説明に尽きると思います。

説明ばかりで話が進まない分早目の更新を目指したいところですね。

目標は3日に1回！

最低でも1週間に1回というところでしょうか。

12/22 追記

パーティの印象についてを消して容姿について追記しました。

元気がいい、というのを第一印象にするのは読み返して違和感があったもので……。

3/1 追記

改稿二回目です。文章量は増えましたがあまり話が進んでないですね。

次回は精霊化の説明と属性の説明になるとおもいます。

属性の説明なんかは一番変わった部分じゃないかなあ……。

前書きと後書きは追記方式にあります。自分への戒めを含めて改稿はなるべく無しにしたいですね。

それではまた次回に

序章 (3) (前書き)

パーティによるこの世界についての説明回です。

3／2 改稿しました。詳細は後書きにて
3／4 ルビ修正

序章 (3)

— — — — — 精霊化と属性 — — — — —

パーティから精霊になるのは簡単ではないと聞いたばかりな訳だがその内容は簡単すぎた。

まるで意味がわからない、だからとりあえず説明を求めよう。

「ちよつとまで、さっき簡単な訳ないじゃないっていったよな?」

「言ったわね」

「ドコが簡単じゃないんだ?」

「祠はトテイアネの各地にあるけど、ここから一番近いのはファリア湖の浮島にあるわ」

「……そこに行くのが難しいのか?」

「いいえ、簡単にいけるわよ?」

パーティの顔は「まだわからないかしら?」とでも言いたげだ。

うーん、祠は複数、行くこと事態は特に難しくない、ではなにが難しい?

木の実の入手? いや、それならそうと言うはずだから多分違う。

祈りの言葉が難しい? やっぱりそれならそうと言うはずだろうからコレも違う。

ではドコが問題なんだ?

………ん? 祠はトテイアネの各地にある?

つまりそう言うことなのかな。

「ぶー、時間切れです。こんな簡単なこともわからないんじゃないんですよ、姉さんガツカリだぞ？」

「いや、ちょうど今わかったところだよ」

「ほほー、では答えてもらいましょうか」

「祠はトティアネの各地にあるってことは祠まで行かなくちゃいけないわけだな」

「うんうん」

「つまり、常人では意識を保てないこの世界で祠まで行って祈りを捧げるなんてことは難題な訳だ。要は俺にとっては簡単なこの第一条件が最大にして最初の難関ってことだろ？」

「はい、よく出来ました。いままで人間から精霊になったのは三人だけ。そして一番最初に人間が精霊化したのはいまから約七十二億年前、そして一番最近人間が精霊化したのは約五億年前になるわ。さて、どれくらい難関なのかわかっていただけたかしら？」

「…七十二億年前とかどんだけなんだ。正直予想していた展開とは桁が違いすぎる。」

「ほらほら、ポカーンとしてないで感想を聞かせてよ」

「いや、見ればわかると思うけどビックリした。まさかそこまで低確率な話とは想像の範疇外だった。思わず呆然とアホ面を晒すぐらいにな」

「ふふん、正直運がいいわ。ユズじゃなくて私がね。人間の精霊化に立ち会えるなんてものすごくレアなんだから。このチャンスを逃したら次は何億年後かしら？って話だもの」

「確かにそう言われると想像を絶するレアイベントだな」

「でしょでしょ。いくら時間を操れてもトティアネの時間は不変だから時間を飛んで一万年後なんて事は出来ないのよね」

「んー、それってどういうことになるんだ？」

「例えば私がここでちょっと待ってねって外の世界に遊びに行くとするじゃない」

「ふむふむ」

「私が外の世界で百年放蕩して帰ってきたとするじゃない。それで帰ってきたときに私の主観的にはユズと会うのは百年ぶりで久しぶりって思うわよね」

百年も経ってお久しぶりだけで済ませちゃうのはやっぱり精霊だからなのかね？

寿命が長くて百年程度の人間からしたら想像できない。

まあこのまま何事もなければ俺もその想像できない方に仲間入りしちゃうんだけどさ。

「そりゃ百年も会わなけりゃ久しぶりだわな」

「でもユズから見た私はちょっと世界門ワールドゲートの向こうへ行っと思ったらまた世界扉ワールドゲートが現れてそこから出てきたって感覚になるから全然久しぶりじゃないのよ」

「ふうむ、不思議なもんだな」

「だから外の世界から帰ってきた人には初対面じゃなければお久しぶりですって言うのがマナーよ」

「なるほどねー。精霊にも色々マナーとかあるんだな」

「特殊なのはそれぐらいで他はどの世界でもごくごく常識的なことよ？ 基本は人にされて嫌なことは自分もやらない。これぐらいじゃないかしら？」

確かにどこに行っても通用しそうな常識だな。

しかし世界門ワールドゲートか召喚サモンズゲートの門とはまた別なんだろうしやっぱり魔法なのかな？

「シンプルでいいね。ところで世界扉ワールドゲートって魔法だよな？」

「そうよ。世界と世界を渡る扉『召喚の門』サモンズゲートはこれの亜種ね」

「俺にも使えるかな？」

「精霊になれば魔法も使えるようになるわよ。何でも出来るとは言わないけど自分の属性に合うものなら出来ることはすごく多いわよ」

「属性って木火土金水とかそういうやつか？」

「そうそう、本当はもっと多岐にわたるけどね。普通の精霊は物が

年月を経て至るから元になった物に属性を左右されやすいわね。例えば樹木だったら木や土や水に近い属性になることが多いわ」

「人間は？」

「三人とも特に共通点はないからランダムじゃないかしら？」

「んないいかげんな……」

「仕方ないじゃない、誰かが統計を取っているわけじゃないし私だって話の種に聞いただけだからね。そもそも過去に三人しか例がないんだから統計って程の物にならないわよ？」

う……納得できてしまった。そうだよなあ、なにしろ前例が少なすぎる。こればかりはどうしようもないか。

「それもそうか……。そういえばパティの属性は何になるんだ？」

「主属性が時と空、副属性として破と雲を持っているわ」

「うん、まず主属性と副属性の違いがわからん。そして属性の意味もわからん。時はそのままの意味なんだろうけど他がさっぱりだ」

「主属性と副属性の違いは主属性は修行すれば100%力を引き出せる属性で副属性はどんなに修行しても70%ぐらいまでしか力が引き出せないわ。相性がよければ副属性から主属性に昇格することもあるけどね」

「なるほど、何事も修行次第ってことなのね」

「そうなるわね。因みに世界扉は時と空の属性が必須になるわ」

「それってもしかして厳しい？」

「そうね、属性はものすごく細々と分かれてるからね。精霊達の間でも特別扱いされる属性とされない属性があるけど時と空は特別扱いされるほうね」

「特別扱いされる属性って他になにがあるんだ？」

「えーとね、創、破、時、空、生、この五つはことさら特別扱いされるわね。創は無から有を生み出す力、破は過程を無視して破壊という結果を生み出す力、時は文字通り時間を操る力、空は空間に関する力、生は再生させる力、生み出す力じゃないからそこを間違えないでね」

うーん、確かに聞いただけでも特別扱いされそうな感じがするな。
でもパーティの属性って副属性含んで数えたからってこの内三種って
……すごくないか？

「……パーティの属性って破格過ぎないか？」

「そうねー。私はふらふら遊んでるだけだから偉い精霊ってわけでも
ないし気にしないで？」

「そうするよ……」

なんかある意味予想通りの反応で脱力するわ……。

しかし自力での世界移動は無理そうだけどパーティはいつまで付き合
ってくれるんだろうか？

いつまでも一緒について訳にはいかないんだろうけど面と向かって聞
くのは怖い、かも……。

「あと属性じゃないんだけど増幅の固有技能スキルを持ってる精霊は重宝
がられるわね」

「固有技能……ってまた新しい単語ですか」

「説明してなかったわね。魔法とはまた違う特殊な力を固有技能スキルっ
ていうの。ユズの世界には超能力者っていなかった？ そう言うのを
固有技能スキルって言うのよ」

「偽者が多かったけどそう言うのは確かにいたな」

「力の大小もそうだし種類やもっている数まで千差万別よ。精霊スキルと
しての属性は最低でも何か一つは持つことになるけど固有技能スキルに関
しては持つてる子と持って無い子に別れるわね」

「それじゃ属性は火だけしかないけど固有技能スキルは五種類持つてるみ
たいな極端な例も？」

「数は少ないけどいい訳じゃないわね」

うーん、それなら当たり属性は引けなくても最悪使い勝手の良い固
有技能スキルが手に入ると嬉しいな。

「なるほどね。そういえば自分の属性ってどうすればわかるんだ？」

「自身の内面に聞けば自然と頭に浮かぶわ。固有^{スキル}技能も同様ね」

「調べる魔法とか道具ってないのか？」

「一応あるけど魔法は自分の知らない、理解できない属性はわからないし道具を作っても作者が登録していない属性は当然出てこないから意味がないわ」

「じゃあ珍しい属性があったら言わなければバレないのか」

「そういうことになるわね現に私が破^はの属性が使えるだなんて知っているのはほんの一握りよ？」

「やっぱりそう言うのはアリなのか」

「そうね、特別扱いされる五種は色々重宝する属性だもの、まじめな子でなければ隠す子も多いわ」

「パティは遊び人っぽいからあまり公言しないタイプなんですわ、わかります」

これまでの会話でこの子はその手の楽しいことが好きなタイプってのは理解したから間違っていないはずだ。外れてたら嘘だッ！って言うてやろう。

「当たり前よ♪私はまじめなタイプじゃないもの。会話しててそれぐらいわかるでしょ？」

「うん、とてもそういうタイプには見えないね」

「あら酷い。たまには真面目にやってるわよ？」

「たまにしか真面目にならない、が正しい気がしますよ」

「ふふっ、お見通しのね」

やれやれ、楽しそうだなあ……。

それでも、堅苦しいよりは格段にいいね。

「さて、大事なところは大体説明できたと思うんだけど何か質問はあるかしら？」

さて、ここまでで聞いた話を整理しておこうかな。

この世界はトティアネ、全てのお隣に存在する世界。

元いた地球に戻るのには容易ではない。

理由は地球一つとっても平行異世界があるせいで特定が難しい。

精霊になるためには祠で祈りを捧げ木の実を食べる。

精霊には属性と固有技能がある。

固有技能は運次第で持てたり持てなかったりする。

属性と固有技能は自身の内面に問いかけるとわかる。

自身の属性によって使える魔法と使えない魔法がある。

世界扉を習得するには時と空の属性が必須。

精霊化した人間は過去三名のみ直近でも5億年前が最後。

精霊になったときの属性は元々の起源に近いものになる。

人間が精霊化する場合の属性に法則性は見られない。

貴重な属性は創、破、時、空、生の五種。

こんなところかな？

およそ13,000字が13行になってしまった……。でもメタネ
タは程々にしないと怒られそうだ。

他に聞いておくべき事は……んん？　そう言えば根本的なことを聞く
のを忘れていた。

「そういえばさ、言語体型ってどうなってるのさ？」

「え？」

「今までの会話は明らかに日本語でやりとりしてたでしょ？　地球フ
アンだから日本語いけちゃうの？」

「ああ、そういうことね。今喋ってる口の動きと貴方の耳に聞こえ
る音、比べるとどうなってる？」　「おわ、言葉と口が一致してなく

て気持ち悪いよ!？」

「つまり私は日本語を喋っていません」

「これも魔法？」

「その通りです。これは始原魔法『言葉の祝福』^{ワーズブレンディング} っていう言葉を司る精霊達による翻訳魔法なの」

「翻訳魔法か、便利そうだね」

「実際便利なのよ。この魔法があるおかげで言語体系がまるで違う種族と意思の疎通が容易になるんですもの。この魔法がない状態なんて考えたくないわ」

「なかなか便利なんだな。英語のテストの時とかに重宝しそうだな。あれ？これってどの程度まで出来る魔法なんだろうか。」

「この言葉の祝福^{ワーズブレンディング}ってどの程度のことまで出来るんだ？」

「単純に喋った言葉を翻訳して、耳には言ってくる言葉を翻訳して、さらに視覚に入った言語も翻訳できるわよ。外の世界での旅行には必須魔法と言っても過言ではないわ」

「おおお……便利すぎる。ひょっとして動植物の言葉も翻訳できたりするのか？」

「うーん、残念ながら意思を持って話す言葉でなければ上手く魔法が作用しないらしくて植物に関してはダメみたいよ。木から至った精霊^{デレバス}なんかは念話^{テレパス}みたいな力で会話できるみたいだけどそれも大雑把な意思を感じ取るぐらいなものらしいわ」

「そっか、残念。でも動物はいけるんだな」

「動物でも相性の良い悪いはあるみたいだね」

「うおお！やる気出た！猫や犬と簡単でも会話できる日が来るなんて夢のようだ！」

この魔法だけはどんな属性になっても必死で覚えなければなるまい。

「この魔法は何の属性が必要になるんだ？」

「特には必要ないわ。自身に魔力があればあとは言葉を司る精霊と契約をするだけだもの」

「契約を拒まれたりとかは？」

「聞いた事がないから大丈夫じゃないかしら。対価として魔力を求められるけど等価交換ギブアンドテイクなんてのは何事においてもそうでしょう？」
確かにそれが普通か。

なら支払う対価もない俺の面倒を見ているパーティはなんなんだろう？

お人好し、いや精霊だからお精霊好し？

……語呂が悪すぎる。

さて、大体必要な事は聞けたし祠に案内してもらおうかな。

「さて、それじゃそろそろ祠に案内してくれないか」

「それじゃ行くわよ」

「は？」

—————そうしてパーティが指を鳴らした次の瞬間、俺達は祠の前に一瞬で移動したのだった。

序章 (3) (後書き)

少々中途半端かもしれませんが今回はここで終了。

1話辺り2,000字程度としているんですが少ないでしょうか？

まだ世界について説明したいところ色々残ったままだわ、ううむ……。その都度小話程度に入れていきましようかね。

3／1 追記

あれやこれやと一部は大雑把にですがほぼ説明完了と言ってもいいでしょう。

次回更新の『序章 (4)』からは新規部分になります。

それではまた次回

序章 (4) (前書き)

家族にパソコンとられてしまいましたのさーorz

なのでP S 3からの投稿になるんですがこれがまた辛い・・・・・・変換に難はあるし三点リーダーは使えない。

造語の類の辞書登録は出来ないし散々なのです。

読みにくいかもしれませんがP C復帰次第改稿しますのでご容赦ください。

3 / 5 改稿 以後の改稿(第5部分まで)は全て新規投稿部分になります。

因みにP Cは手元に返って来ているので三点リーダーも普通に使ってます。

序章 (4)

— — — — — 精霊に至った日 — — —

— —

あ……ありのままに今起こった事を話すぜ！

パーティが指を鳴らしたかと思ったら景色が一瞬で変わって祠の前に移動していた。

なにを言ってるのかわからねーと思うが（以下略）

「で、パーティは今なにをしたんだ？」

テレポートマジック
「転移魔法を無詠唱で♪」

あ、やっぱり魔法だったのか。

しかし無詠唱とかあるんだなあ、聞きたいだけ聞いたと思った端からまた新しく聞きたいことがどんどん出てきて困る。俺、そんなに勉強熱心な方じゃないはずだったんだがな。

「指を鳴らすことに何か意味は？」

「ないわね。ほら、なんとなく格好いいじゃない？」

「はいはい……言いたい事はわかるよ。」

またこのノリかよ。力が抜けるわ。

「ノリが悪いわねえ……」

「俺にそんな事を期待しないでくれ。ところで無詠唱で魔法を使うのってやっぱり難しいのか？」

「精霊にとっては然程難しいことじゃないわ。ただし自分の属性と相性が悪い魔法だと難しいかな。火属性しか持っていない子が水属性の魔法を無詠唱で使うのはやっぱり無駄に疲れるわね」

「なるほど。そういえば火と水みたいな相反する属性を同時に持つこともあるのか？」

「あるわよ。その場合はどっちの属性魔法を無詠唱で使っても苦にはならないわよ」

ふーむ、やっぱり自身の属性ってのは重要なんだな。

「パティの苦手な属性って何になるんだ？」

「私？そうね……やっぱり創そうちが苦手だわ。元々が扱いが難しい上に破はの属性と相克だもの。あとは生せいとか治療系かしら……破はの属性持ちは創りだす事、治す事と相性が悪くなるから仕方ないんだけど。あと防御系も苦手ね。結界系は空属性持くうってるから平気なだけだね。あとは火と土に類するものかな、雲が水系統だし」

破属性があると攻撃特化になりやすいのかね。
うーん、荒事には向いてるかもしれないけど個人的には破属性は要らないな。

時ときと空くうは必須として創そうちか生せいが欲しい。

今までの話を総合すると自身の属性に合わなくてもある程度の魔法は使えるみたいなんだけど……。

「そっか。ところでさっき世界扉ワールドゲートは時ときと空くうが必須って言ってたけど、魔法によって必須属性の有無があるってことだよな。その違いって？」

「魔法の難易度ね。んー、ユズ的にわかりやすく言うなら……そうね。例えば火属性で消費MP500の呪文があると仮定して、火の主属性を持っているとこの呪文の効率を一割、つまり消費MP50で発動できるの。火が副属性の場合は頑張れば四割ぐらいまで減らせるかな」

「つまりこの呪文の場合火が副属性で最大MPが200なら一発で枯渇しちゃうわけか」

「その通りよ。そして相性が悪い属性、この場合は水に類する属性しかない子だと効率が悪くなるのよ。初期の状態で約三倍、どんなに頑張っても二倍の消費は覚悟しないといけなくなるわ」

「うへえ……。それはなんというかそっちを覚えるなら別の属性で代用したくなるな」

「それが普通の反応だし実際に態々相性の悪い魔法を使おうとする子はいないわよ」

「そりゃそうだな。で、今までの話を纏めると消費MPが200の水属性はこの呪文は無理って事になるのか」

「そうね。つまり世界扉は時と空の属性が無いとすごく効率の悪い呪文なのよ」

「概ね理解した。つまり最大主属性九割、副属性六割の高効率、反属性が二倍のものすごい低効率の消費になるって訳だな」

「うんうん。そして良くも悪くも無い相性の魔法は普通で二倍、頑張って通常消費ぐらいの効率ね」

「げっ……。どのみち属性外の魔法は要練習になるのか」

「うわあ、これは面倒だ。蓮華と合流する前に修行しないとダメっぱいな。」

「あたりまえじゃない。最初から効率よくなんでも出来る人はいないわよ？もちろん上達の早い遅いがあるから一概にどの程度とは言えないけど主属性の魔法でも三ヶ月はみっちり練習しないとね？」

「あいよ……。そうだ世界扉ってどのくらいの消費なんだ？」

「実際に数値化されてるわけじゃないけど通常消費で5,000って所かしら？因みに自意識の薄い一般的な所謂下級精霊の平均的な最大魔力が1,500程度で、自意識のしっかりした普通の精霊が平均3,000ぐらいね。私みたいな自意識も形もしっかりしているのは上級精霊って呼ばれるんだけどこの平均がだいたい8,000かな。もちろん魔力なんて修行次第で上がるし時を経ることで増

すから一概には言えないんだけど……」

ちよ、なんつー馬鹿消費。そりゃ属性必須だわ。

てか上級とか下級とか区別があったんだな。

「必須属性の意味がよくわかるお話ですね……。まあその話はもういいや、どうあっても時と空が必要だって良くわかったし。それはともかく上級とか下級とか精霊にも上下関係ってあるのか？」

「あるようなないような感じがしら。上級だから下級を無条件で従わせられる訳じゃないもの……。やっぱり年月を重ねればそれなりに敬意を払われるけど、所詮その程度だしね。年長者でもやっぱり知識とか経験が乏しい方だとあまり敬ってもらえないから。実力主義って事じゃないけどそれに近い所はあるかな？単純な力より叡智……知恵の方が重要視されるかも」

「そもそも文化的な社会とかあるのか？」

「ないわよ。精霊なんて飽くまで個人主義だもの。属性ごとのコミュニティもあるところにはあるけどね。だからカミサマ気取りで外の世界に介入するのもいるし退屈を嫌って外の世界に遊びに行くんだもの」

「カミサマ気取りって……」

「実際にどこぞの世界でカミサマとして敬われている子もいるし創生神だったのかもしれないけどその存在を見た事もないければ聞いた事もないわよ。私達精霊にとってカミサマなんているかどうかもわからない存在だもの。実際、ある程度の力を持った精霊ならカミサマの真似事は出来るからね。さすがに全知全能とまではいかなけれど」

「精霊に振り回される世界ってのもなんか悲惨だな」

「介入した時点で介入した世界としなかった世界に分岐しちゃうけどね」

「そうして世界は増え続ける……ってか」

「そんな感じね。今この瞬間にも世界は増え続けてる。外世界の時間からは隔絶されているはずなのに不思議よね」

「言われてみれば確かに不思議だな」

「世界について調べている精霊もいるけどいまだ答えは出ていないわ」

「そんな精霊もいるんだな」

「変わり者扱いだけどね。たぶん暇つぶしの一環なんじゃないかしら？」

世界の謎に挑戦するのが暇つぶしとかパネェ……。

基本的に寿命がないから何事も気長になるのかね？

「暇つぶして……。生まれたときなら精霊ならともかく人間から精霊になった奴らは退屈で死にそうだな。人間から精霊になった奴らって今何してるんだ？」

「皆いろんな世界を渡り歩いて家庭を作ってみたりカミサマやってみたりしてるらしいわよ。実際に出会った事があるわけじゃないから噂話程度の事しか知らないわ」

「人間は退屈だと死んじゃうんだよ」

「精霊だって退屈はキライよ？退屈すぎて五百年以上眠りっぱなしって精霊知ってるし」

「寝すぎだろいくらなんでも……」

「退屈の回避方法はそれぞれってコトよ。私だって何か面白いことないかしらって退屈しのぎにふらふらしていたからユズの声に気付いたんだもの」

「ま、そこは助かったよ。本当に感謝してる」

「どういたしまして。おかげで貴重な体験が出来そうで感謝してるわ」

「なにせ数億年単位に一回のイベントですもんねえ……」

「私の知る限りでは過去に例が少ないと言う意味では二番目よ」

「一番目は？」

「ユズと同じ例で召喚の門に巻き込まれてきた子がいたんだけど……」

……

「けど？」

「猫だったのよね。なんか足にじゃれ付いてたらしいんだけど運悪く召喚の瞬間に靴下に爪を引っ掛けちゃったらしくて……靴下ごと空中へダイブする羽目になったらしいわ」

「それはまた災難な……」

「しかもこの世界で意識があつたものだからなんやかんやと精霊になる事が決まってるね。当時はその噂話で持ちきりだったわ」

「へえ。属性はなんだったんだ？」

「月よ」

月……セーラー（ry

いやいやいや、でも月？なんかおかしくないか？

「月ってトティアネにはないよな？」

「ないわね。たまにいるのよ、よくわからない属性の子。月と呼ばれるモノ自体は姿や個数は違えどアチコチの世界にあるんだけど……」

「その実態は？」

「たしか闇と反射の複合だったと思うわ。私の雲もそうだけどいくつかの属性が合わさると違う表記になったりするの。因みに雲は水氷雪霧雷の複合ね」

「そうなのか。いやはや、これは勉強頑張らないといけないなあ……」

「ま、仕方ないわね」

確かに仕方がないし、もう諦めたさ。

やれやれ、どうにか力と知識を付けて蓮華と合流してなんとかして

元の世界に返ろう。

頑張らないとね。

「さーて、そろそろ精霊になってくるよ」

「ん、じゃあ注意事項ね。祠の中にある魔法陣の中心でこの木の実をくわえた状態で『精霊になる』って強く念じて。自身の存在が変じてきたと感じたら木の実を噛み砕いて頂戴。これは魔力の木の实

といって膨大な魔力をこの中に閉じ込めてある木の実なの。精霊は魔力の塊みたいなものだから木の実の魔力を糧にして精霊へと生まれ変わる訳ね。だから木の実無しでこんなことをすると魔力欠乏になって下手をしたらそのまま消滅してしまう。だからちゃんと良いタイミングで噛み砕いてね？早すぎるのはダメだけど多少遅くなるのは問題ないから」

あ、ちゃんとリスクもあるのか。そこんとこちゃんと説明してくれないんだもんなー……。

どうせうつかり言い忘れたとかそんな事だろうけど。

「おっけい。さすがにまだ死にたくはないしな。はてさて、どんな属性になる事やら……」

「私は入り口で待ってるわ、と言ってもここから祠の奥まで見えちゃうんだけど」

「ありゃ、本当だ。それじゃ行ってきます」

「ええ、いつてらっしゃい」

さて、いよいよだな。

魔方阵にかいてある呪文やら紋様(?)は全く読めない。

俺自身に翻訳魔法がかかっているわけじゃなかったんだな。

片方が使っているだけでちゃんと相互会話できるんだなあ……。

うん、覚えよう。この魔法だけは絶対。

しっかし、こんなちっこい木の実に膨大な魔力、ね。
ほんとかいな？

ま、いまさら疑わないけどさ。
んじゃ、やりますかね。

「口に含んでつと」

うお、もっと苦い木の実かと思ったがなんか塩っ辛い……悉く予想
を裏切ってくれるなあ。

精霊になる、と強く念じるんだったか……。

「……精霊になる」

おっと、思わず口に出しちゃった。

……おおお！？

なんか体が熱く……やべ、早く噛み砕かないと……って噛み砕くと
酸っぱいとかなんぞ！？

熱い、熱すぎる……、や、これ、けっこうきつ……ヤバイ、意識が、
たもて……。

「う……あ……つ、うがあああああああああああ……！！
……！！」

「えっ!？」

叫び声が聞こえたその瞬間、祠の外にいた私は思わず声を上げていた。

魔力の木の実特有の魔力が開放され大気に魔力が溢れるところまではよかった。

そこまでは何も問題なかったと思う。

ただその次の減少がおかしい。周囲の魔力がわずか数秒で、枯渴したのだ。

だいたいだけど枯渴するまで五秒かかっていない、おかしすぎる。

魔力の木の実一粒で並の上級精霊四人分程度はあるはずなのだ。

そこで改めてユズを見て気付く、拙い。魔力欠乏になっている。

「ユズっ!」

慌てて駆けつけてポケットから魔力の木の実を取り出し砕く。

これで、なんとか……。

「嘘でしょっ!？」

彼の体はどれだけの魔力を求めているのか、またしても周囲の魔力が消えていく。

叫び声すらもう出ていない。苦しそうに蹲って喘ぐだけだ。

いけない……このままでは半精霊、ヘタすれば霧散して消えてしまう。

出し惜しみなんてしてられない。私は慌てて手持ち最後の魔力^{マナ}の木の^{シード}実を砕く。

「ユズ！しっかりして！」

そうして彼に手をかけたのが失敗だった。

「やばっ！？結界をっ！」

触れた瞬間、私の魔力まで無尽蔵に奪うのを感じ慌てて結界を張ろうとし、私の意識は途絶えた。

「……くぁ。死ぬかと思った」

正直まだ頭が痛いし体も火照っている感じがする。

こんなにキツイなんて聞いてないぞ、まったく。

それでも、なんとか無事精霊になれたんだろうか？

「パティ？」

「(……………ハアイ。なんとか精霊になれたみたいね)」

あれ？

なんか変なところから声が聞こえたような…………。

「パティ、どこだ？」

「(あはは…………ユズの中よ。私あなたに取り込まれちゃったみたい)」

それでなんか頭の中に直接声が聞こえるのか……………え？

―――な、なんだってー！？

「それで、どういう事なんだ？」

「(えーっとね、ユズはどうにも規格外らしくて魔力の本の実二個も砕いたのにそれでも全然足りなかったらしくて三個目を砕いたの。で、その時点でうっかりあなたに触っちゃったの。そうしたら私の魔力まで奪おうとしてきたから慌てて結界を張ったんだけどね…………。ほら、さっき精霊は魔力の塊みたいなものって説明したじゃない？本当に魔力の塊扱いされて結界ごとユズに飲み込まれちゃったみたい)」

「…………ごめん。きっと俺が悪いんだよな」

「(違うわよ、私が不用意にユズに触ったのがいけないのよ)」

「それでも、俺と出会わなければこんなことには…………」

「(すーっぷ！いいのよ、これは私の好奇心が生んだ結果なんだから)」

「それで、元には戻れるのか？」

「(うーん、それなんだけどね。残念ながら無理だと思う)」

「そんな!？」

「(あ、慌てないで? 完全な形では、と注釈が付くから。でもこのまま時間が経過すればいずれ私はユズに完全に吸収されて消えるわ)」

「……それで、不完全な形でも元に戻るには? 俺は何をすればいい?」

くそっ! 平気そうな声音でとんでもないコト言いやがって……。

俺に氣を使わせないようにしてるのがミエミエなんだよ!

「(うん、お願いしたいのは私が宿るに適当な依代を見つけて欲しいの)」

「依代?」

「(そうよ、武器でもなんでもいいんだけど魔具、特にインテリジェンスアイテムを作れる技術のある人を探し出して欲しいの。そうすれば私は武器に宿る形だけど存続できる。)」

「インテリジェンスアイテム……よくある喋る武器とかそういうのか?」

「(そうよ、それもあるべく早くね。どうか私が消えてしまう前に……。)」

「任せる。いわばパーティは恩人だからな。なんとかしてみせるさ!」

——— そうだ、どんな形であれ、なんとかして
も救ってみせる!

序章 (4) (後書き)

いかがでしたでしょうか。

P S 3だと元に戻すとか使えないし(延々と愚痴になるので以下略)

仕事で使うからーとか職場に持っていかれたので果たして復帰はいつになるやら……

しばらくはP S 3からの投稿になりそうです。

コレだから共用P Cは！

P S 3からだともブストライクが出来ないのが切ないのですよo r z

3 / 5 改稿(新規投稿部分) しました。

今回はちよつと長いです。もう一回序章やるにはちよつと足りないので……。

さて次回は序章→第一章に移る前の纏め話、所謂幕間ですね。

幕間なので文章量はどれぐらいになるかわかりませんが一つで纏める予定です。

幕間が終わったらいよいよ本編……なんですがきつと更新はまちまちになるでしょう。

きつと修行編を頑張っちゃうと思うんだ……。

パティを早いところにかしてあげないとね。

まあどうするかなんてもうプロット上では決まってるんですけどネ

今回視点変更を入れてみたんですがわかりにくいでしょうか？

上手く視点が移ったコトが伝わらないならside-in/side-outなんて表記しなければならいですね。

個人的には好きな手法ではないんですが……。よろしければご意見お願いいたします。

幕間（序章）第一章（前書き）

説明回がね！

と言うわけでお待たせしました。

どの程度お待ちの方がいるのかわかりませんがね。

一月書かなかったら書き方を忘れました＼（＾Ｏ＾）／
なんか会話ばかりな回です。

03／05 改稿（新規部分）
04／18 修正

幕間（序章第一章）

—— — 幕間（序章第一章）

「よし、まずはパーティが消えてしまう前に依代よりしろを確保しないといけないんだが何か良い案はあるか？」

「（そうね、魔法と科学が混然と発達した世界があるんだけどどうかしら？魔法的に依代に定着させれなくても人格と記憶はデータとして残せると思うから）」

「そっか、本当にゴメン。パーティの全てを俺が奪ったばかりに……」

「（気にしないで。こんな結果になるのは予想外だったけど楽しんでいるから）」

「そう言われても気にしないのは無理だ。」

「————だって俺と出会いさえしなければパーティが死ぬ事はなかったのだから……。」

「だがいつまでも引きずって落ち込んでいるわけにはいかない。」

「パーティを吸収してしまう前に解決策を見つけないといけないから……。」

「（ところで貴方の属性は？）」

「んー、主属性に創そうと生せい、副属性に時ときと空くうと氷ひようだな。おまけで固有ス技能キルも持つてるな。ESPに魔力操作だな」

「（属性も破格ね。ESPはわかるんだけど魔力操作ってなに？）」

「時ときと空くうと氷ひように関してはパーティから吸収した結果みたいっばいぞ？

魔力操作は、魔法としてじゃなく魔力のまま操作すると考えてくれればいいよ。手で触れれば吸収譲渡思いのままだ」

「（ああ……、それで私の属性が減っていたのね。固有技能スも地味に便利っばくていいわね）」

「たしかにな。それじゃ、早いところパーティの依代を見つけないとな。ナビゲートよろしく」

「（まかせて、外世界番号71502891へ世界扉ワールドゲートを。やり方はわかるわね？）」

「当然！いくぞ、世界扉ワールドゲート！！」

魔法の使い方、固有技能スの使い肩は自然と頭に浮かぶなにが出来てなにが出来ないのか。

そんな事が自然とわかる。しかしこれが魔法を使う感覚か、結構疲れるな……。

早く慣れないとな。

「（うん、ちゃんと出来たみたいね）」

俺の前にはつい数時間前に見た召喚サモンズゲートの門を小さくしたような人一人分ほどの扉がある。発音は同じゲートなのに門と扉と訳が違うんだなあ……。

そんなどうでもいいことを考えながら俺は世界扉ワールドゲートを潜り抜けた。

———外世界換算三億七千九百九十万千二百九年後＋トテイアネ
換算百二十年後———

「やれやれ、ようやく蓮華^{ファイッ}の所にいけるな」

『ユズがあちこち寄り道するからでしょ？』

そうやって返事するのは俺の持つ杖、もちろん中に封じられているのはパティである。

杖自体の名前はツアイティム、中に封じられている精霊はパトリシアと我ながらなんとも芸がない。

正直そういうのは苦手なので色々と察して欲しい。

「まあそう言うなよ。確かに時間はかかったけど色々手札は増えたぞ？」

『何度か結婚して子供まで作っておいてよく言うわ』

「いやいや、仕方ないだろ？愛しちゃったんだからさ」

『はいはい、どうせ私は貴方の道具ですから人生にまで口出しできませんよーだ』

「でも俺の始まりからずっと一緒にいるのはお前だけでこれから一緒なのもお前だけだよ」

『死が二人を別つまで？』

「そう言うこった。俺が先に死ぬか、お前が先に壊れるか……」

『私が壊れても治してくれるんでしょ？』

「当然！お前が修復できなくなったらお前のことを忘れるまで寝て過ごしてやる」

『ま、私はそう簡単には壊れないけどね？』

「信頼してるよ、相棒」

『杖だけに？』

「そう言う親父くさいギャグはいらねえよ！」

やれやれ、何万年一緒に過ごそうが俺とコイツの関係は変わらない。独りになってもこいつがいるから狂わないでいられる、長い生に絶望しないで生きていられる。

俺の、俺だけの最高の相棒だ。

「さて、それじゃ蓮華^{アイツ}のいる世界へ行こうか！」

『外世界番号37564246の生命の書へアクセス。検索………：
レンゲ・ノムラ、聖樹暦957年、グラド王国王城に勇者として
召喚、生命の書へのアクセス時間オーバー、接続をカットします』
「上出来！パティ、杖とお前に異常はないか？」

『大丈夫です。今回は三分程度だし魔力も十分だったから』
そう、これはとっておきの裏技だ。書へのアクセスなんて無茶は早々出来ない。

俺自身じゃ適性はないしパティだって完全な適正があるわけじゃない。

トティアネにるときしか使えないし必要な魔力も膨大だ。
外世界時間で千年はそれ専用魔力を蓄えねばならない。

あまり長時間アクセスするとパティもツアイティムの方も参ってしまうので滅多なことでは使えない。

「よしよし、お前が壊れちゃ元も子もないからな」

『心配してくれてありがとう♪』

「どういたしまして。それじゃ、行きましようかね」

『はい、今回の旅も楽しいといいですね』

「そうだな。蓮華^{アイツ}をしっかりサポートして送還先を特定するぞ」

『今回は裏方なんですよね？』

「そ、蓮華^{アイツ}が勇者で俺はそのサポートだ。だから色々なコネを作るために召喚されるより前の時代へ行くぞ。世界扉^{ワールドゲート}！」

――― 久しぶりの親友に会うために俺は扉の向こう側へと足を踏み出した。

幕間（序章／第一章）（後書き）

2月はそんなに忙しくない月なのでそれなりの更新頻度は保てそうです。

それではまた次回お会いしましょう。

3／5 追記

さて既存投稿分への上書きは今回で終了です。

今回は序章と一章の間の幕間話、兼修行編への繋ぎなので短いです。

今後の予定としては

第一章 ユズ一人旅

第二章 蓮華と合流、蓮華修行

第三章 旅立ち

第四章 魔王討伐

第五章 終章、蓮華と共に帰還

とまあこんな感じですが

しかし予定は未定であって決定ではないので今後どうなるやら……。ぼちぼち頑張っていきますね。

04／18 修正部分

———外世界換算千九百九十万千二百九年後／トティアネ換算十年後———

を

———外世界換算三億七千九百九十万千二百九年後＋トティアネ換算百二十年後———

に変更しました。外伝とかの振り幅に余裕を持たせるための措置です。

あと外世界とトティアネの時間は別個で経過するので加算の方が正しいかなと
大勢に影響は出ません、たぶん……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779j/>

始まりはいつも突然に(仮)

2010年10月28日07時41分発行